The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デンジャラスもしも ・きらいな毛玉にやさしくなる時
Author(s)	behblues
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 24-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

behblues

■デンジャラスもしも、の巻

わたしつねにすでに母さんの死を、抜きにはなにも考えられない。

そのようなわたし、“ALS 患者さん ” の舩後さんの講演会を、スカイプ越しにきいていた。昨年 11 月のこと。

「ALS は不治の病である」「医師は、『なんとかなるんではないか』という患者さんの儚い希望を砕くような説明を繰り返さざるをえない」ということばがでていた。それはたんなる病気の説明ではなくて、舩後さんが病院で、診察券出して少し待たされてお金払ったりする場所で言われた具体的なことば、生きていくうえで自分に内包せざるをえなくなった肉感的なことば、の再現だとおもった。それは何度か繰り返された。

講演会のおしまいのころ、質疑応答で会場のだれかが尋ねた。

「失礼だとは思いますが、もしも ALS が治ったとしたら何がしたいですか ?」

この疑問文は、わたしの体を硬くした。

感情としてたぶん、「失礼」ということばは遠くなさそうだった。でも質問者の言った「失礼」とは遠そうだった。今、“ALS 患者さん ” の舩後さんに対して発された、ということは関係しているけれど、わたし「舩後さんに対して失礼だ」と憤っているわけではない。その質問者は存在を意識してさえいなかっただろうわたしにとって「失礼」的な不快なのだ。なにが。

それからずっと、考えていて思い当たった。

「もしも」が。「もしも」がわたしを悲しくさせた。

可能性が 0% のなにかを語るときに付ける「もしも」は、だれに対しても平等で、魔法みたいだ。でもそれは、いつでも “ 良い魔法 ” ではない。

「もしもお母さんが生きていたら〜でしょうね。」は、母ともわたしとも接点のない人間でも、やすやすと口にする構文。死んだ人間が、生きている可能性は 0%。わたしの死んだ母さんが、生きている可能性は 0%。それは確かに、その「もしも」発話者にとっても、わたしにとっても、等しく 0%。でも、わたしは、わたしのほうは、すでにその「もしも」は何万回も何億回も、考えてきている。わたしの耐えたすべての「もしも」を、誰かの口にした「もしも」は無自覚に剥ぎ取っていく。0 × X=0、左辺の X を気に留めずとも、右辺の 0 をスタート地点にして語り出すことができるという、どうしようもなさが悔しかった。

舩後さんの X を気にしなくても発することのできる「もしも」は、わたしにとっておなじみの「失礼」なやつだって感じて、だから不快で悲しかったのだ。

「もしも」はしょっちゅう素敵な魔法としてもはたらくけれど、その正体は危険なやつだ、って、これが舩後さんの講演会のおかげで、今のところわたしがいちばん考えたこと。

■きらいな毛玉にやさしくなる時、の巻

わたしつねにすでに母さんの死を、抜きにはなにも考えられない。

そのようなわたし、今年のITP-SL春合宿に参加した。和歌山県で1泊2日。

この世には、コミュニティボールというものがある。参加者ひとりひとりが、質問に答えながら芯に毛糸を巻いていく、結束バンドで束ねられる、輪になっているところをはさみで切るとボールになる、その後それを持つことは発言権を持つことになる、という毛玉だ。

わたしは。そもそも毛糸というものが。突然なぞの物体に束ねられる感じが。“コミュニティボール”という名前はすごくうさんくさいのに強力な(「わたしこんな毛玉作りに参加したくない」って言ったら、その後永久に“コミュニティ”から追放される気がしてしまう)ところが。ボールを使って対話をすると発言権がないときなんだか自分のからだごと声を持て余す感じでいつも仄かに寂しくなるのが。好きではない。だから基本的に“コミュニティボール”がきらい。

しかし合宿の一日目、コミュニティボールはまた作られる。あーあ。

でも、今回のこの毛玉、そんなにきらいじゃなかった。

理由でいちばん大きいのは、田坂せんせいってひとの存在。まず、名前を“コミュニケーションボール”と間違っていて、そのままなんとなく周りのひとにも伝わった。「(うさんくさいが)強力」な名前を、へっぽこな感じの名前にしてくれた。それから、完成してボールとして使いはじめてから、ボールが手元になくても、いい声でたくさん相づちやあいの手を入れていた。とりわけ衝撃的だったのが、誰かが発言したあと沈黙がおとずれたとき、「だれか、受けとってあげて?」「受けとってくれる人、いませんか?」とかけていた声。

たしかにかつてのコミュニティボールを使った経験のなかでだって、たとえば「パスしてください」という言い方はされていたことがあった。けど、それはわたしのなかで、ボールを持っている人に対しての、「ボールをほしがっている人に向けて投げてください」以上の意味にきこえてなかった。でも、そっか、ボールは、話したいひとがただ入手するのではなく、その前に話したかったひとが話したものを、まず受けとって、それから話しはじめるんや!って気がついて、びっくりした。びっくりしてから、おもろいやんって思った。毛玉をだ。

もうひとつの理由は、毛糸を巻く作業のとき、存在している人間をやり過ごさなかったこと。今回の輪にははじめ、“ALS患者さん”の久住さんが入っていて、そして輪から一歩下がったところにヘルパーさんが座っていた。毛糸は、ヘルパーさんにも手渡された。

ああ、ここまで書いて、ひとつめの、「田坂せんせいの存在」っていうのも、この「やり過ごさない」ってことかも、って思いあたる。

もしかして、毛玉を好きになるかもしれない予感に満ちる。

(behblues)